櫛の類いだから黄葉する。黄葉するから落葉する。時雨（しぐれ）が私語（ささや）く。凧（こがらし）が叫ぶ。一陣の風小高い丘を襲えば、幾千万の木の葉高く大空に舞うて、小鳥の群かのごとく遠く飛び去る。

木の葉落ちつくせば、数十里の方域にわたる林が一時に裸体（はだか）になって、蒼（あお）ずんだ冬の空が高くこの上に垂れ、武蔵野一面が一種の沈静に入る。空気がいちだん澄みわたる。遠い物音が鮮かに聞こえる。自分は十月二十六日の記に、林の奥に座して四顧し、傾聴し、睇視（ていし）し、黙想すと書いた。「あいびき」にも、自分は座して、四顧して、そして耳を傾けたとある。この耳を傾けて聞くということがどんなに秋の末から冬へかけての、今の武蔵野の心に適（かな）っているだろう。

秋ならば林のうちより起こる音、冬ならば林のかなた遠く響く音。

鳥の羽音、囀（さえず）る声。風のそよぐ、鳴る、うそぶく、叫ぶ声。叢（くさむら）の蔭、林の奥にすだく虫の音。空車（からぐるま）荷車の林を廻（めぐ）り、坂を下り、野路（のじ）を横ぎる響。蹄（ひづめ）で落葉を蹶散（けち）らす音、これは騎兵演習の斥候（せっこう）か、さなくば夫婦連れで遠乗りに出かけた外国人である。何事をか声高（こわだか）に話しながらゆく村の者のだみ声、それもいつしか、遠ざかりゆく。独り淋しそうに道をいそぐ女の足音。遠く響く砲声。隣の林でだしぬけに起こる銃音（つつおと）。自分が一度犬をつれ、近処の林を訪（おとな）い、切株に腰をかけて書（ほん）を読んでいると、突然林の奥で物の落ちたような音がした。

足もとに臥（ね）ていた犬が耳を立ててきつとそのほうを見つめた。それぎりであった。たぶん栗が落ちたのであろう、武蔵野には栗樹（くりのき）もずいぶん多いから。

もしそれ時雨（しぐれ）の音に至ってはこれほど幽寂（ゆうじゃく）のものはない。山家の時雨は我国でも和歌の題にまでなっているが、広い、広い、野末から野末へと林を越え、杜（もり）を越え、田を横ぎり、また林を越えて、しのびやかに通り過（ゆ）く時雨の音のいかにも幽（しず）かで、また鷹揚（おうよう）な趣きがあって、優（やさ）しく懐（ゆか）しいのは、じつに武蔵野の時雨の特色であろう。自分がかつて北海道の深林で時雨に逢ったことがある、これはまた人跡絶無の大森林であるからその趣はさらに深い、その代り、武蔵野の時雨（しぐれ）のさらに人なつかしく、私語（ささや）くがごとき趣はない。